会　　議　　録

会　　議　　名	平成３０年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　　務　　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	平成３０年８月７日（火）１８時３０分～１９時３０分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 川﨑京子委員 浜田真二委員 鈴木遵矢委員		
欠　席　委　員	上原佐世子委員		
事　務　局　員	薩摩学芸顧問 コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、永井 　同　　はけの森美術館学芸員　鈴木、中村		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	１　展覧会「小杉放菴記念日光美術館所蔵　絵画で国立公園めぐり」観覧 ２　事業実施報告等 ３　意見交換 ４　その他　　次回運営委員会日程調整		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	１ 開催した展覧会・ワークシップ等及び今後の予定 ２ 平成３０年度年間スケジュール		

平成３０年度　第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会

平成３０年８月７日（火）

【鉄矢会長】皆様、こんばんは。本日はご多忙の中お集まりいただきまして、ありがとうございます。ただいまより、平成３０年度第２回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

次第の１の展覧会の観覧につきましては既に皆様、ごらんいただいたかと思いますので、次の議題に進ませていただきたいと思います。

配付資料の確認をします。事務局のほうからお願いできますでしょうか。

【事務局】そうしましたら、配付資料の確認をさせていただきます。

まず１枚目が次第です。次に「開催した展覧会・ワークショップ等」と書かれました資料１。続いて「30 年度年間スケジュール」と書かれたものが資料２になります。

最後に、第１回運営協議会会議録の校正依頼となっております。

そのほか、お手元に、今回の展覧会のチラシのほうも配付しておりますので、ご確認いただければと思います。

資料については以上です。

【鉄矢会長】ありがとうございます。

それでは、次第の２、事業実施報告等の（１）開催した展覧会・ワークショップ等について、事務局から説明をお願いいたします。

【中村学芸員】ではまず、開催した展覧会から報告させていただきます。資料１の最初のところをごらんください。８月４日から、「平成２９・３０年度市町村立美術館活性化事業第１８回共同巡回展　絵画で国立公園めぐり―巨匠が描いた日本の自然―」を開催しております。廿日市市、瀬戸市から小金井に回ってきて無事にスタートいたしました。小金井の後、釧路市に巡回いたします。さて、今回の展覧会は実は出品作品数が 80 点になるのですが、小金井は展示スペースを確保でいないということで、今回に関しましては、少し変則的ですが、思い切って 40 点ずつの総入れ替え制というかたちで会期を半分に区切って、前期・後期に分けることにいたしました。皆様にご覧いただいた現在の展示は、前期の展示になっております。40 点ずつどういう風に分けるかということに関しましては、日本のちょうど真ん中、中部地域で分けるかたちにしまして、前期・東日本編、北海道から中部の大体富士山、静岡のあたりまでを展示しています。この後、8 月 26 日（日）まで前期の展示を行いまして、展示替えを挟んで、後期の展示に変わります。後期の方は、中部

から九州にかけての西日本の地域を展示予定です。展示番号の 40 番までが前期、41 番からが後期というかたちになります。詳しい作品は、図録をご覧いただければと思います。関連の企画に関しましては、２の今後開催予定の展覧会・ワークショップ等に記載されていますので、この後報告させていただきます。

【鈴木学芸員】(2) のその他ですけれども、福岡県立美術館と新居浜市美術館で開催された「没後 50 年　中村研一展」に作品を貸出しました。展示写真がいくつかありますので、スライドをご覧ください。こちらは福岡県立美術館の展示室の様子です。ちょうど新居浜の風景を描いた水彩素描が展示されていますが、住友クラブの所蔵作品など、普段なかなか見る機会の少ない作品も含め、画業を概観することの作品が一堂に会しており、大変興味深い展覧会であったと思います。私が新居浜市美術館でギャラリートークを行ったときの写真がございます。大きな展示室に作品が展示され、福岡県立美術館とは少し異なる展示構成でした。中村の戦前から戦中期の大型作品―戦争画、《弟妹集う》《瀬戸内海》―が横一列に並べられた展示構成は、迫力があり見応えがありました。開催した展覧会・ワークショップは以上になります。

【鉄矢会長】ありがとうございます。なにか質問・ご意見等ございましたらお願いします。

なければ、次に（２）今後開催予定の展覧会・ワークショップ等について、事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】では、今後開催予定の展覧会・ワークショップ等について報告させていただきます。

今やっている「国立公園めぐり」の後に、企画展としまして、仮称ですが「ほとけのくに―台東区所蔵　敦煌莫高窟壁画模写と法隆寺金堂壁画模写に見る浄土の景」としまして、台東区が所蔵している壁画模写の展示を行う予定でございます。内容は、前回の運営協議会のときに説明したとおりのものになりますけれども、会期としましては１０月下旬から１２月中旬までを予定しています。細かい日程に関しては台東区の都合と合わせて、調整をしているところです。壁画の模写というやや大型の作品を借りてくるということですので、こちらの美術館では今まであまり経験したことのない大画面のものを、１階の展示室を中心に配置をしていく予定です。

次に、少し順番が前後しますけれども（２）展覧会関連企画は、現在開催中の「国立公園めぐり」の関連企画から案内をさせていただきます。

「国立公園めぐり」の展覧会は、結構たくさんの関連企画がございまして、まず１つ目

としまして、来館者への感謝企画として、昨年も行いました雨の日夕立プレゼントを行うことを決めました。昨年ご好評いただいたので、認知を上げていくことを含めて今年もやろうということになりまして、雨の日にご入館いただいた方のうち、先着５名様に当館オリジナルグッズをプレゼントする企画です。実は今日、会期が始まって最初の雨の日でしたので、来館した方々に手拭いをプレゼントするということをいたしました。もらった方々にも大変喜んでいただきました。

２番目としましてギャラリートークですけれども、８月１１日、今週末と、展覧会後期の９月８日の２回、実施する予定です。こちらのスケジュールに関しましては、前回の運営協議会、前々回の運営協議会で少し、例えば時間であるとか、ペースなどを再検討してみたらどうかという意見もあったのですが、今回の「国立公園めぐり」、前期、後期の総入れかえ、かつ、ほかにもワークショップをやるということで日程を調整しましたら、２回やるのが限界であるということが発覚しましたので、今回に関しましては２回のギャラリートークという形で、時間もいつもどおりのものからずらさずに行うことにいたしました。

３番目に、はけの森美術館と江戸文化体験事業の共催企画といたしまして、「『江戸写し絵』と絵画でめぐる日本の風景　ちょっと不思議なはけ美の夕べ」という、少し長いタイトルですけれども、江戸から続く糸あやつり人形の一座である結城座の方々を講師に迎えたワークショップを行う予定です。いつもと違うところは、閉館後の時間を使って美術館を行うことを予定しておりまして、５時から７時までという時間帯を使って、夜の時間帯を活用した写し絵を予定しています。暗闇を使って、その暗闇に幻灯のような形で絵を浮かび上がらせて、絵を楽しむということと、できれば簡単に参加者の人たちにも写し絵のもとになる「種絵」というものをつくってもらったりすることも予定しています。ただ写す、漠然と何かを描くのではなく、できれば日本の風景にかかわるようなものを描いてもらって、実際に写してみる。日本の風景と、展示室の中にかけられている油絵の日本の風景というものを見て、少しリンクさせて考えてもらえたらと、そういった内容にしていきたいと考えて、今、結城座とも調整をしつつ、この準備を進めています。

このワークショップの当日は、少し夜の時間帯に入りますので、Musashino はけの森カフェの協力をいただきまして、希望者の方に軽い夕食を提供するというサービスもあわせて行っておりまして、これはワークショップ参加者のうち、希望者の人にそういったサービスがあるというふうになっています。

それから、後半のワークショップとしましては、４番目の「アニメーション背景技法で

描いてみよう、日本の風景」という、制作のワークショップを予定しています。今までにも何度かアニメーションの背景技術の技法を活用した制作ワークショップというのは実施をしていまして、結構、固定のファンの方などもいる大変人気の講座になっていたんですけれども、そちらの内容を今回の「国立公園めぐり」の内容にあわせ発展させました。「国立公園めぐり」に描かれている風景をアニメーションの背景風に描いてみたらどんなふうになるだろうかということで、講師の鮫島さんに、少しアニメ風の風景にアレンジしたものをつくってもらって、それを参加者が参考にしながら、実際に展示されている作品をアレンジした絵を描いていこうと、そういったような内容にしていきたいと考えています。

それから、来館者に向けた感謝企画を幾つか考えておりまして、（１）はけの森美術館×Musashino はけの森カフェの連携企画というのは、以前から、もう１年ぐらい行ってきているものですけれども、それぞれを利用した人に対して、相互の割引サービス、相互のプレゼントサービスがあるという企画になっています。それぞれ細かい内容に関しましては、資料のほうに記載しておりますとおりです。

（２）のリピーター感謝企画に関しましては、今回の展示が前期・後期で、総入れかえ制をとっているということに関連しています。できれば来てくれた人には８０点全部を見てもらいたいということで、前期に来てくれた人に対して、半券を後期に持ってきてもらうと、招待券と引きかえ、後期にお金を新たに払わずに展示を見られるという形にしたいと。前期、後期を通して８０点見てもらうというところにつなげていきたいと思っています。

これが、今回、「国立公園めぐり」に関連する関連企画になります。

【鈴木学芸員】教育普及事業ですけれども、鑑賞教室がありまして、９月７日の緑小学校から１２月１８日の本町小学校まで、８校の鑑賞教室を予定しています。現在、開催している展覧会にご来館いただく学校もございますし、１０月下旬からの台東区の展覧会にご来館いただく学校もございます。

そして、鑑賞教室の事前授業ですが、９月１３日に東小学校で行う予定です。また、台東区所蔵の作品の展覧会のほうでも２校の事前授業を行う予定です。今後、開催予定の展覧会、ワークショップなどについては、以上になります。

【中村学芸員】すみません、ちょっと私のほうでこちらの説明をしてしまいましたので、補足させていただきます。

こちらの「はけの森美術館　ナゾ解き探偵団！」と書いてあるリーフレットも、今回の

企画展に関連して制作したものです。中を開いて見ていただきますとわかるんですけれども、前期と後期それぞれに対応した内容になっておりまして、緑色の面が前期の内容に対応している面、赤い面が後期の内容に対応した面になっております。それぞれ幾つが設定されている調査という名前の謎を解いていくというクイズ形式のワークシートになっておりまして、クイズを解いていくということを通じて、作品をじっくり見てみるということを体験してほしいということで作成したものになります。

最終的には、絵にかかわる情報をいろいろ絵の中から探していくことを通じて、一枚一枚の絵を見ていくといった体験をしてもらって、最後の秘密のメッセージまでを解いてもらう。それで、最後の秘密のメッセージが解けたら受付に持ってきてもらって、最後の秘密のメッセージまで解けた人には、このオリジナルステッカーを進呈するという内容になっております。ステッカーの見本については、横についている丸いはけの森美術館のオリジナルステッカーを前期、後期それぞれで渡すという形を予定しております。

【山村委員】これ、結構難しいんじゃない？

【鉄矢会長】結構難しい。何度読んでも、何をしなきゃいけないのかを理解するのが。

【中村学芸員】これ、実は大人たちからは圧倒的に難しいという意見が出ておりまして、私も内容を確認したときに、これはちょっと何をすればいいんだかわからないのではないか、子どもは相当混乱するのではないかということをかなり危惧として出したんですね。ただいざやってみると、どうやら子供のほうがすんなりやれるようで。

【鉄矢会長】文字に引っ張られちゃうからか、大人は。

【中村学芸員】子供のほうが結構熱心にやって、わりとすんなりやってくれています。

【鉄矢会長】そのほか、何か質問や意見等ございましたら。

【川﨑委員】このリーフレットは、来館するともらえるものですか。

【中村学芸員】入り口のところに、「はけの森美術館探偵団実施中」と張っておりまして、中に入ると、ちょうど展示室に入る手前のテーブルの上にこれが置いてあるんですね。そこから自由にとってもらって、謎を解いていくという形になっています。

【川﨑委員】では、美術館の外で図書館とか、そういうところには特に置いていない。

【中村学芸員】そうですね。美術館に来てもらうと手に入るという形になっています。

【川﨑委員】すごく目を引いて、おもしろそうな企画なのに、これを持って美術館に来る方が、来られるんじゃないかと一瞬思ったんですけれども、美術館まで来て初めてわかるんだと、ちょっともったいないなという気がしました。すごくよくできているので。

【山村委員】これは誰がつくったんですか。

【中村学芸員】これは、実はゲームワークシートをつくることを専門にしている方がいまして、今回、デザイナーさんを通じて、こういう問題を考える専門の人に考えてもらっています。あと、前期、後期でどうやってシートが分かれているという体裁などに関しても、そういうシートを考えるというところでは、そちらの人のアイデアを使ってデザインをしてもらっています。

【山村委員】では、プロの方。

【中村学芸員】そうですね。

【鉄矢会長】これは、はけの森美術館オリジナルになるわけですね。

【中村学芸員】オリジナルです。巡回館の中では当館でしかやっていない企画になっています。

【薩摩学芸顧問】それは個人の人？　事務所みたいな。

【事務局】会社として立ち上げてやっていらっしゃるそうなんですけれども、実質的に１人の人がやっているものです。

【鉄矢会長】意見なんですけれども、子供が読書感想文を書いて、夏休み後、提出するように、美術鑑賞文を書いて、これと一緒にセットで、一応、宿題終わりとなったらいいんじゃないか。これ、真面目にやって、ワークシートをやりますよね。両方はできないのか、夏休み中は。

【中村学芸員】２回来てもらえば、裏も表も。

【鉄矢会長】夏休み、終わってしまうんじゃないですか。８月の終わりで大丈夫？

【中村学芸員】ぎりぎりはできます。

【鉄矢会長】それだけだと、多分先生、だめなんですけれども、感想文があったら、一緒にセットで、ここで文章を書く時間をとってあげると、それで夏休みは終わりと。ほかのワークショップのときも、幻灯でしたっけ。

【中村学芸員】はい、写し絵です。

【鉄矢会長】写し絵のときも、こういうものをやった後に、ちゃんと自分の気持ちを書いてくれて、そのセットで出すと自由研究終わりって、結構いいんじゃないかと思った次第です。

【中村学芸員】学校側がそれでよしとしてくれれば、こちらとしても非常にいいなと。

【鉄矢会長】いいと思うんですよね。

あと、もう一つは、ポストカードのプレゼントというときに、切手は売ってないんですよね。

【中村学芸員】切手は売ってないです。

【鉄矢会長】切手、売っていたらすてきですよね。帰りにぽっと出せば。今までにない、おばあちゃんに書いていこうとか子供が思ったりすると、ちょっと。

【中村学芸員】この辺に、近くにポストがないので、その場ですぐに出せないところが、ちょっと歯がゆいところなんですが。

【鉄矢会長】ねえ。出せるとすてきだなと思ったんですけどね。

【山村委員】ちょっと感想というか、これは個人的な感想かもしれないんですけれども、何ていうのかな、デザイン的にもうちょっとおとなしいほうがいいかなと。チラシだとか、展示を見ての感想で、色がたくさんあり過ぎるような気がします。そのほうが子供さんとか喜ぶのかもしれないんだけれども、絵をきれいに見せるために、抑えたデザインとか、あまり派手にしないというか。そういうことは、もうちょっと気をつけたほうがいいんじゃないか。自分としては、そういうふうに思いました。もちろん、こういういろいろなことをやってきて、興味を持って絵を見てもらう、興味をもってもらうためのいろいろな工夫なので、それを否定する気は全くないんですけれども、そういうデザイン的なこともすごく重要かなと思うし、その中で絵自体、絵のよさ自体みたいなもののほうに関心が行くように、もうちょっと考えてもいいかなという気がします。今回、特に４０点も、あれだけぎゅうぎゅうに、そんなこと言っている場合じゃないでしょうみたいなところがあるんだろうと思うんですが、さっきも見ていて、どうしても、公募展の会場みたいに、横の絵が気になったりします。一個一個、絵はみんな世界が違うわけです。その横に写真が置いてあって、どうぞ比べてみてくださいみたいな感じで飾ってあります。あと、いろいろなバナーもいっぱい色がつけてあって、絵に集中できないような感じがあって、そして、こういうものがあまりたくさんありすぎると感覚的にはばらばらになってしまう感じがする。

どうですか。その辺、皆さん、どう思われるのか。どうなんでしょう。最近、僕は非常に古い人間かなと思いますが、どうですか、学芸員として。そういうところ、気になりませんか？

【鈴木学芸員】今回の展覧会は、巡回展であるということで、多館と調整せねばならないということがあり、必ずしも我々の意見を通すことができるわけではありませんでした。他館のデザインの方向性などもありましたので、最終的に今回のようなかたちになったの

かなと思っています。山村先生のご指摘、もちろん、おっしゃる通りです。その一方で、来館者からは、地図や写真があるので展示内容がわかりやすいという声がありました。とはいえ、当館はなにぶん展示スペースが小さいので、そういうことも相まって、先生がご指摘された、展示室が窮屈であったり、散漫な印象につながったのかなと思います。また、当館がもう少し大きいスペースの展示室であったなら、今回の問題は目立たなかったのかもしれないとも思います。いずれにせよ、今回の展覧会によっていろいろな課題が見えてきたと考えています。

【中村学芸員】今回のワークシートに関しましては、特にこういうゲーム性を持たせたワークシートをつくるのが初めてだったということもありますので、そういった意味では、まずとにかく目を引きたいというところがあったんです。それもあって、やはり最終的にできたものとして見ると、やはり色としてはかなり派手な色使いになってしまったところはあります。ただ、これが最終形態というよりか、これが初めてやってみた、言ってみれば最初の一歩なので、やってみて、反応を見て、今後こういったゲーム性を持ったワークシートをつくっていくのかということや、今後つくっていくとすれば、どういうようにバージョンアップしていくべきなのかというところにつなげていく、一つの試金石になればというところはあります。

あとは、実は展示スペース、やはりぎちぎちという印象は出てしまうかなと思っています。キャプションも縦に１列でかなり長いなという印象を受けたかと思うんですけれども、本来の並べ方としては、２列で真四角になるということを想定してつくられているキャプションなんですね。ただ、実は当館のほうで作品を並べ切るためには、あれを２列にして、四角く展示をすると、とても絵をかけるスペースがなくなってしまうということで、当館はやむを得ず１列にしているところがあります。そういったところでは、先ほど鈴木のほうからもありましたけれども、巡回館の中で小金井用にどう考えていくかというところで、やはり今後、少し改善していくべき点もあります。

【鉄矢会長】これ、最終的には、上野の博物館関係のコマーシャルのような感じがする、何だろう、ラスコーの洞窟みたいなのを描いているからでしょうね。

【中村学芸員】そうですね。ちょっと表に特定の絵を使ってしまうと、前期、後期で必ず入れかわってしまうので、表には絵を使わないというのが最初にあったんですね。

【鉄矢会長】ああ、決めたんですね。

【中村学芸員】それで、日本をめぐっているような感じにしたいということで、最終的に

こういうデザインになったんですが。

【山村委員】こういう額縁というのは、向こうで勝手につくってくるわけですか。

【中村学芸員】そうですね。

【鉄矢会長】ほかにご意見ございますでしょうか。

【山村委員】あと、写し絵というのは、ごめんなさい、ちょっとよく聞いていなかったのかもしれないけれども、だまし絵を投影するの？　それとも影絵みたいな感じ？

【中村学芸員】もともとの写し絵というのは、ガラスに描いた絵を照らして写すものなんですけれども、今回、ワークショップという形ですので、実際に参加者に体験してもらうものについては、ガラスという素材ではなくてセロファンみたいな、そういったものを活用した…

【事務局】ＯＨＰシートです。子供がやるので。

【中村学芸員】…そういうものになる予定です。講師のほうから、本来ならガラスを使って写すだとか、そういったところも、できればレクチャーとして混ぜながらしたいと思っています。

【山村委員】なるほど。

【鉄矢会長】ほかにご質問等ありますか。ご意見。

　では、次第の３に入りまして、意見交換をしたいと思います。委員の皆様から何かありましたら、お願いいたします。

【川﨑委員】先ほど切手があったらいいねというお話があったんですけれども、ああいうグッズというのは定期的に見直しをして、新しいものを、次、これをつくろうというのは決めているんですか。

【中村学芸員】どちらかというと、まずグッズをつくるための予算がつくか、つかないかというところが、まず大きな判断材料になっています。実際に予算がついたとしても、では、その予算内でつくれるものは何なのかとか、都度、やはりその年の頭に考えていくことになりますので、なかなか長期的に、これをつくって、あれをつくってという判断をして、計画的にというのは難しい状況ではあるんです。そうこうしている中で、今までにつくったものの在庫が足りなくなってきて、追加でつくらなければいけなくなるということも出てきますので、やはりちょっと計画的にグッズをつくるということに関してはなかなかうまくいかないところがあって、お金がついたら、そのときにつくれそうなものをみんなで頭を絞って考えるというような感じになっています。

【鈴木学芸員】最近ですと、数年前に付箋と手拭いをつくりまして、その翌年にトートバッグをつくりましたので、最近は少しずつグッズを増やしてはいるんですけれども、ただ予算ありきなので、そのときによってということになります。

【川﨑委員】私、ちゃんと見なかったかもしれないんですが、下に手拭いもありましたか。

【鈴木学芸員】あります。

【川﨑委員】ちょっと気になったので。トートバッグと手拭いは、物としてはすごく使えて、いいなと思って。今後に期待します。

【中村学芸員】今は、どちらかというと種類をいっぱい増やしていこうとするというよりは、今までつくったグッズ、こういうものがあるということの認知を上げていくことが大事だなというところもありまして、手拭いも、雨の日のプレゼントに活用しています。そのあたりは、やはり手拭いをオリジナルでつくっているということを、まずみんなに知ってほしいというところもあって、そういう形にしています。

【川﨑委員】グッズは、美術館の外で売ったりということはやはりできないんですか。何かのイベントのときに持ち出しで売って、こういうものがありますという宣伝をするのは、やはり難しいですか。機会がないですかね。

【事務局】お祭りとかに持っていくのはちょっと難しいんですけれども、例えば東小金井の黄金やさんとかに置いてもらえるような方法はないかなということは、ちょっと模索しているんですけれども、やはり市にお金が入らなければいけない、金銭の受け渡し的な問題がいろいろあるので、そこをちょっとクリアしてから、名産品、特産品の中にあれが入るようになればいいなと思っているのと、一応、小金井もふるさと納税があるんですけれども、その返礼品には、一応なってはいます。

　先ほどの手拭いの話なんですけれども、私もちょっと気になっていて、もうちょっとディスプレイを、スタッフみんなでディスプレイをして、さわれるようにすればもっとわかってもらえるかなと。今、きれいに額に入ってしまっているので。

【川﨑委員】私も、ぱっと見たときにわからなかったので。

【事務局】多分、絵と間違えられてしまって、あまり手拭いという認識が、もしかしたらないかもしれないです。

【川﨑委員】触れたほうが感触とか、いいかなと。

【事務局】なので、首だけのマネキンがないものかと探しているんですが。ちょっとその辺、工夫していきたいかと思っています。

【鉄矢会長】すみません、質問なんですけれども、この図録の中に絵に©がついているのと、ついていないものがありますよね。

【中村学芸員】はい。

【鉄矢会長】これは、どういった意味なんですか。

【中村学芸員】©マークがついているのは、著作権者の希望で、そういう指示があったものです。

【鉄矢会長】つけておいてくれと。

【中村学芸員】はい。やはり近現代なので、著作権が保護期間内の人のほうが大半なんですね。人によっては、美術家連盟とか、そういったところに自分の著作権の管理を委託している人なんかもいますので、それぞれの許諾を取ったときに、画像の使い方に関しては指示がありました。©マークで自分のクレジットを出してくれという人も何人がいましたので、その人に関しては記載をしているという形になります。

【鉄矢会長】わかりました。勉強になります。

【山村委員】じゃあ、これ、著作権はもう全部、作者の継承者が分かっているんですね。

【中村学芸員】ほぼ、ほぼわかっているんですけれども、数名、やはり連絡がつかなかった人ですとか、行方がわからなくなった人がいましたので、その人たちに関しては、後ろに連絡をくださいという形で記載をしております。

【山村委員】先日、法律が通って、著作権が没後５０年だったのが７０年になると聞きました。聞いている？　聞いてない？

【事務局】ＴＰＰに関係なくですか。

【山村委員】アメリカ抜きのＴＰＰ１１か国です。たしか凍結していたのに、政府判断で入れたようです。今、法律が通って、施行は１年後らしい。ちょうど中村研一とか、今、ちょうど東京都美術館の藤田嗣治展とか没後５０年なんで、来年から切れるなと思ってたら。

【事務局】えっ、復活しちゃうんですか。

【山村委員】わからない。その期間、どうなるのか。経過措置とかあるのか。

【中村学芸員】いずれにせよ、現段階では５０年の保護期間が終了した人たちということで計算して、許諾は取っています。

【山村委員】今はそうですよね。どうなるのかわかりませんが。

　ごめんなさいね、話題、変えていいですか。今年の展覧会は、今回の国立公園、それか

ら台東区のものということなんですが、来年に向けて自主企画というのは何か考えていらっしゃいますか。

【鈴木学芸員】一応、検討していて、現在調査をしていたり先方との調整などをしているところです。

【山村委員】まだ具体的には未定ですか？

【鈴木学芸員】まだ現実的にどうかなというところですので、詳細が決まり次第、ご報告できるかと思います。それから、先ほどご報告するのを失念したのですが、台東区の展覧会では、岩絵の具をつくろうというワークショップを企画しています。実際に石を砕いて、絵の具を作つくり、その絵の具で絵を描くという内容です。

【山村委員】芸大の日本画のほうと協力してもらうか。

【鈴木学芸員】芸大の、日本画ではなくて彫刻科の先生にワークショップをお願いするんですが。

【山村委員】彫刻科？

【鈴木学芸員】はい。

【薩摩学芸顧問】石を使って、石彫家なんですけれども、その石を壊すのも好きなんですよ。自分で顔料を作り、遊んで、いろいろなところでワークショップをやっているので。私と同い年の人なんですけど。

【山村委員】壊して、すり鉢でこうやって砕くんですか？

【鈴木学芸員】そうです。そういう感じで、幾つかの絵の具をつくって。

【鈴木委員（館長）】石を砕くわけじゃないですか。その石というのは、例えば赤い系色ができる石とか、青い系の石とかというのは、あちこちから集めてくるというイメージ。

【鈴木学芸員】一応、そうですね。いろいろな。いろいろといいましても、時間の制約もありますので、もちろん限られた色になりますけれども、そういった石を集めて、砕いて、すってという形です。

【鈴木委員（館長）】すって。時間かかりそうだね。

【鈴木学芸員】なるべくショートカットできるようにしようと思いますけれども。

【山村委員】東京都美術館では、科学博物館と、芸大と、東京都美術館と３館で協力してワークショップを行いました。科学博物館の鉱物の標本とか、地層の勉強とかをちょっとした後に、芸大に行って岩を実際に砕いて、これはこういう岩石がこういう色になるんだよとかというワークショップです。理科の勉強と美術の勉強が一緒になるというような。

子供はいいんじゃないですか、両方関連させられるので。

【鈴木学芸員】なかなか岩絵の具ということを、体験したことがあまりない方のほうが多いのかなと思います。せっかくですから、こういうことも勉強できる機会になればと思いして、ワークショップを企画しています。

【山村委員】あと、聞こうと思っていたんですけれども、「没後５０年　中村研一展」で、福岡県立美術館と新居浜市美術館の入館者数はわかりますか。

【鈴木学芸員】大体の数でしか聞いていないのですけれども、福岡県立美術館に関しては３,０００人を超したと聞いています。新居浜市美術館は、２,０００人に届かなかったようです。立地条件から新居浜よりも福岡のほうが集客が多かったのではないか、と考えています。

【山村委員】あんまり多くはない。

【鈴木学芸員】そうですね。やはり中村研一は洋画壇を牽引する画家だとは思いますけれども…その辺も課題なのかもしれないですが。

【山村委員】福岡のほうからすると、ちょっと少なかったという感じかな。

【鈴木学芸員】そうですね。

【鉄矢会長】ほかにご意見等ございますでしょうか。

私からですけれども、オンデマンドでＴシャツに印刷できるような仕組みとか、エプソンにクリックすると出してくれるとか、届くとか、あとはスカーフになるとか、地域の人たちが喜びそうな気がするんですね。隠岐の島の出身の人たちは、隠岐の島の絵が身につけられるとか。清津峡なんてすごいきれいだし、これ、スカーフになったらきれいだろうなと思うんだよね。

【中村学芸員】やはり各地域によって、それぞれに思い入れのある絵って結構分かれるんですね。特に、関東地域、ここの館しか開催しないのでそういった意味では関東に対する思い入れを持っているのは、やはり一番強いというところもありますし、ほかの地域でも、近くの地域に対する絵の興味というのが結構ある。ただ今回、やはり難しいのは、著作権、保護期間が終了していない人が多いので、画像の使い方という意味では、逐一、８０人の画家の、ほぼほぼ全員、多くの人たちに許可を取らなくてはいけなくて。

【鉄矢会長】それは、うちがやるわけじゃなくて、小杉放菴記念日光美術館がやってくれればいい。日光美術館がそういう仕組みをつくると、多分、おもしろい。

【中村学芸員】そうですね。今回、巡回展の事務局のほうで全部、今回の許諾は取ってい

たので、そういった意味では、画像を載せるためにお金がかかる人もいたりして、そういったところでもなかなかちょっと、画像を使っていろいろな館が自由にグッズをつくるというのも難しかったところがあるんですね。

【鉄矢会長】そうですね。なので、こういう巡回展が終わって、この館がよりよく、うちの館がよくなるのもいいんですけれども、日光美術館自身がよくよくなるためのアイデアが出てきたのだったら、日光美術館に伝えてあげるというのもあるのかなと。

【中村学芸員】そうですね。日光のほうでも、この８０点のコレクションを国立公園協会が解散するときにまとめて引き取ったはいいけれども、やはり小杉放菴というメーンにしている画家がいるので、８０点、一気に国立公園の絵画だけを展示室の中に出すということをやったことが今までないそうなんですね。そういった意味では、この８０点のコレクションをどう活用していくかというところに関しては、小杉放菴記念日光美術館のほうでも、今後、考えていくところだと言っていたので、そこはぜひお伝えしたいと思います。

【鉄矢会長】いろいろな地方の人のほうが、うれしそうに裏磐梯だぜってＴシャツを着そうなので。

【中村学芸員】はい。土地勘とか、やはり地理的なところの感覚が、各地域の人にとって、ぴんとくるところと、ぴんとこないところというので、かなり絵に対する興味が分かれてくるところはすごくあるんですね。

【鉄矢会長】向きもそうでしょうね。

【山村委員】これ、写真を撮ったのは誰なんですか。

【事務局】国立公園のレンジャー（公園管理人）さんに撮ってもらって。

【中村学芸員】小杉放菴さんのほうで、受け入れるときに全部撮ったということで。

【山村委員】受け入れるときにみんな委託して、わざわざそこまで行って、この角度というのをとった。

【中村学芸員】小笠原の人なんかは、一生懸命セッティングしてくれて、似せてくれています。レンジャーさんによっては、探したけれども、場所がよくわからなかったので、これかなというところを撮ったという人や、撮りに行ってみたら大分様子が変わっていたとか、そういう人とかもいるので。

【鉄矢会長】由布岳とか、あれですものね。もうちょっとちゃんと空の色を出せば。

【山村委員】全部、素人のほうがいいと思う。絵の邪魔になる。

【鉄矢会長】そういう部分もありますね。

【中村学芸員】そういう意味では、ぱちっと絵とつながる写真が撮れているレンジャーさんと、頑張ったけれども、いろいろ課題の残ったレンジャーさんもいます。

【山村委員】風景も変わるし、緑の色も大分違うから。地域によってレンジャーの運営が違うでしょうからね。

【鉄矢会長】ありがとうございました。

　では、次第の４番目、その他、次回の日程調整等に行きたいと思います。

～（日程調整）～

【鉄矢会長】では、次回の運営協議会は、１１月１３日の火曜日、１８時３０分から２０時という予定でいきたいと思います。よろしいですか。

　会議録の確認については、事務局からお願いします。

【事務局】お手元に前回の会議録の案をお配りさせていただいています。修正などございましたら、９月４日の火曜日までにコミュニティ文化課にご提出ください。

【鉄矢会長】ありがとうございます。

　ほかにありますでしょうか。なければ、以上で、はけの森美術館運営協議会を終了いたします。お疲れさまでした。

―― 了 ――